

車いすから見た新しい世界

～障がい（肢体）理解とバリアフリー～

学年等

4年生 総合的な学習の時間など

ねらい

- ◇ 障がいへの理解を深める。
- ◇ 車いすを体験することをきっかけにして、身の回りのバリアフリーの大切さに気づき、みんなが暮らしやすい町について考える。
- ◇ 車いすを使っている人への必要な援助をするための知識・技能を身につけ、ともに生きていくために、どのように接していったらいいか、自分たちにできることはないか、などを考える。

取組みの流れ

<全7時間>

- 第一次 障がい（肢体）について知る。Aさんと出会う。・・・2時間
- 第二次 車いすを体験する。・・・2時間
- 第三次 身の回りのバリアフリーの工夫について調べ、自分たちの町を住みやすい町にするためにできることを考える。・・・3時間

展開例

第一次 2時間 障がいについて知ろう

① 知る 【障がい者の生活や気持ちを知る】 1h

- ◎ パラリンピックに向けてのドキュメンタリーを視聴し、スポーツにチャレンジしている姿から学ぶ。

気づかせたいこと

障がいは決して『かわいそうなこと』ではない。障がいのある人の意志や周りの支えにより人生を切り開いておられる。

このような番組を見るのが初めてという児童がほとんど。障がいのある人たちのチャレンジする姿に児童たちは、ただただ「すごい」と驚き、感心するばかり。児童たちは、その本人や周りの人の、あたたかさやひたむきさなどにふれて、何かを感じ、考えたことでしょう。

<児童の感想>

北京オリンピックならテレビでよくやっているけど、パラリンピックはニュースでちょっとしかながされないのはなんでだろうと思った。車いすバスケットで、何度こけてもあきらめず起き上がったのがすごかったです。人間ってその気になれば何でもできるんだと思いました。

② 出会う 【地域に在住の車いすを使っているAさんからお話を聞く】 1h

- ◎ 車いすに乗りながらフライングディスクをあやつるAさんから、車いすでの生活の様子と日頃感じている思いなどをお聞きする。

- ▽ 普段の生活で障がいのある人から見たマナー違反の例として、スーパーの障がい者用駐車スペースに健常者が駐車していることや、障がい者優先エレベーターに健常者がいっぱい乗っていて車いすが乗りにくいときがあることなどを紹介。
- ▽ 障がいの有無に関わらず、一つのことに一生懸命に取り組むことの大切さを述べられた。

気づかせたいこと

- ◇ 自分たちの身近な方の話から、車いすから見える世界と思い。
- ◇ みんなが暮らしやすい町にするには、バリアフリーの考えが必要である。
- ◇ 不便な面がありながらも能力を発揮している。それをサポートしてくれる人がいる。
- ◇ 障がいがあることで不便なことはあるが、決して不幸ではない。



<児童の感想>

「Aさんと出会って」

今度、フライングディスクの大会があるようなので、優勝してくださいね。マナーが悪い人がいるということをお母さんに話しました。大人でも気づいていないことがあるようでした。

僕たちにとっては、歩道の端に犬のふんがあるのはあまり気にしてなかったけれど、それは車いすのタイヤがとおるあたりにあるので、とても困ってしまうということをはじめて知りました。

これからは車いすに乗っている人のお手伝いをしたいと思います。

第二次 2時間 車いすを体験しよう

③ 体験する 【車いすに乗っている人の状況について、体感してみて理解する】 1h

- ◎ 実際に車いすに乗って階段や狭い場所、段差のある場所を通り、ドアの開け閉め、トイレで手を洗ってみるなど、いろいろな場所で様々な行動を試みる。
- ◎ 車いすを使っている人への必要な援助をするための知識・技能を身につける。

④ 感想 【実際に車いすに乗ってみて、自分で歩いたときとの違いを知る】 1h



段差があつたら一人ではあがれないよう！



気づかせたいこと

- ◇ 車いすに乗っている人にとって、学校内で不便を感じる場所はどこか、なぜか。
- ◇ 車いすを使っている人の気持ちやおかれている状況。
- ◇ 操作の途中で、どのように声をかければいいのか、どこに立てば一番いいのか。

<児童の感想>

「車いすに乗ってみて」

- 「この学校は古い」と改めて感じました。いちいちティッピングレバーをふまないといけないので、とても大変でした。もうちょっと、がたがたの道や段差がなかったらいいのと思いました。途中で溝にはまって、介助の人に助けもらった。階段の下や上は介助の人がいたからいけたけど、いなかったら無理だと思った。

- 人を乗せて段差を降りるとき、ちょっとこわかった。自分で曲がったりするとき、かたがとても痛かった。車いすであんなにつかれるとは思っていなかった。乗ったとき、こけへんか不安だった。いつもは何も考えずに手を洗っていたけど、車いすに乗りながら手を洗うときは背中を丸めて手を伸ばして、やりづらかった。今度、車いすの人がこまっていたら、手伝ってあげたい。

第三次 3時間 暮らしやすい町を考えよう

⑤ 調べる 【学んだバリアフリーについて、身の回りの状況を調べる】 2h

◎ バリアフリーについて話し合い

→ 自分たちの身の回り（校内、学校の周辺、近所など）で、バリアフリーになっている所、なっていない所について意見を出し合う。

【バリアフリーになっている所】

レストランのトイレ、新しくできた駅、市役所、バリアフリー対応信号機など

【バリアフリーになっていない所】

手洗い場、バス、歩道、古い駅
駅前の自転車置き場など

◎ 実際に車いすに乗ってみて、学校周辺でバリアフリーになっていない所を調べる。



⑥ 考える 【いろいろな人が暮らしやすい町とはどんな町か考える】 1h

◎ 自分たちの町を暮らしやすい町（不便なことや困ることが少ない町）にするためにはどうしたらいいのか話し合う。

気づかせたいこと

- ◇ 段差、信号、駅、自動販売機など、実際に車いすに乗った視点で見ると、いろいろと不便なことがあることを体感する。
- ◇ ただ感想を述べ合うのではなく、自分たちにできることはないだろうかを考える。

【児童の意見】

- ▽ 新しくできた駅はバリアフリーが進んでいるが、古い駅は車いすの人には使いにくい。
- ▽ 身近な大人に不便な場所を知らせることで、暮らしやすい町にしていく。
- ▽ バリアフリーマップを作って市長に相談する。
- ▽ 普段からいろいろな人の立場にたって、ものごとを考えていかないといけない。

＜児童の感想＞

「取組みを終えて」

- ビデオを見たり、お話を聞いたり、車いすに乗ったりして、今まで体験したことがないことをやってみて知らないことがわかり、今までとは町の見方が変わった。
- 犬を散歩させるとき、話（犬の糞は車いすの通行に支障がある）を聞いたことを思い出した。
みんなが住みやすい町にするためには、まだまだバリアフリーじゃないところがたくさんあるので、みんなで改善していかないといけないと思った。

取組みを終えて

児童たちは障がいのある人との豊かな出会いによって、障がいのあることが「かわいそう」というネガティブな感想をもつのではなく、その人の特性を生かした能力を発揮する姿や心の持ち方、周りの人々の援助によっていきいきと生活している様子を聞いて、認識を新たにしようだ。

そして、車いすを実際に体験することにより、大変さ、気持ちが実感でき、障がいのある人の目線で身の回りのバリアフリーを考察できた。また、車いすに乗りながら、サポートしながらのフィールドワーク学習によって、車いすに乗っている人に対する関わり方を体で学ぶと同時に、新たな「課題」（誰もが暮らしやすい町をつくる）が見えたようだ。

今回の取組みにより、バリアフリーとは障がい者が社会生活に参加する上で生活の支障となる物理的な障がいを取り除くことだけをいうのではなく、一人ひとりの心にある障がいを取り除くこと（心のバリアフリー）も含んでいることが理解できたであろう。人の立場に立って物事を考える感性を養えたことで、障がい者への見方、関わり方が変わったようであり、このような取組みを継続することにより、車いすを利用している人だけではなく、身近にいる様々な支援を要する人たちの思いに気づき、その思いに応える行動ができる人に育てていきたい。

そのためにも今回の取組みだけで終わるのではなく、これからも人の立場に立って物事を考える感性を養っていくような取組みが必要であると考えている。

【ポイント】

☆ この取組みは「障がい者の生活などの理解」として、「視聴覚教材や当事者の講話などの事前学習」を行った後で、「車いす疑似体験」を行い、バリアフリーの重要性を学ばせる教育実践である。日頃、障がいがある人と出会ったり話したりする機会の少ない児童に対して、「パラリンピックを鑑賞する」「実際に地域生活をされている障がい者からの講話」といった十分な事前学習が行われている。従来から福祉教育の一方法として取り組まれている「車いす疑似体験」であるが、事前学習なしに、疑似体験のみを行うと「障がい者はかわいそう、大変」「私たちは障がいがないとよかった」といったネガティブな意識を子どもたちが感じてしまう可能性もある（本資料集10頁参照）。

そこで、障がい者ができないことを強調するのではなく、当事者の話を通して、児童が「何度こけてもあきらめず起き上がっていたのがすごかったです。」「僕たちにとっては歩道の端に犬の糞があるのは、車いすのタイヤがとあるあたりにあるのでとても困ってしまうことをはじめて知りました。」などの問題意識を持って、「疑似体験（体験学習）」を行うことで、障がい者個人の問題ではなく、社会の問題としてバリアフリーの重要性を考えるといった、より深い学びに導くことができる。

心（こころ）通（かよ）わせて

～支援学校との交流～

学年等

5年生 総合的な学習の時間など

ねらい

- ◇ 障がいのある児童とふれあいをもつことを通じて、ちがうことの素晴らしさや生命の尊厳を体感する。
- ◇ 障がい者の状況を知り、ともに生きるためには、どのように考え、どのように行動すべきかを考える。

【指導について】

- ▽ 障がいのある児童と出会い、ふれあいをもつ体験を通して、ちがいのあることの素晴らしさや生命の尊厳を体感し、自分も含め一人ひとりがかけがえのない存在であることに気づかせたい。
- ▽ 障がいのある児童とともに楽しく遊ぶための工夫を考える過程を大切にするとともに、実際に活動することで、いろいろなコミュニケーションの取り方があることを体得させたい。
- ▽ 支援学校の中にある様々な設備や機器にふれて、それらの役割を知り、誰もが生活しやすい社会について考えさせたい。
- ▽ 支援学校との交流を通して、社会には様々な人々が暮らしていること、その誰もが自分らしく幸せに生きていける権利を持っていることを理解し、どんな場面においても相手を思いやる心、助け合える心をもって生きていける人に育てたい。

取組みの流れ

<全 10 時間>

第一次	障がい者の状況を知る	3 時間
第二次	支援学校との交流に向けて	4 時間
第三次	支援学校との交流	2 時間
第四次	振り返り	1 時間

展開例

第一次 3 時間 障がい者の状況を知る

① 知る 【障がいについて知る】 2 h

◎ 「五体不満足」 （乙武洋匡 講談社）（先天性四肢切断の著者が、自身の生活体験などをつづった本）

◎ 「光とともに…自閉症児を抱えて」 （戸部けいこ 秋田書店）

（自閉症児「光」とその家族の葛藤や日常生活の大変さ、保育園や小学校の特別支援学級での生活、中学校の特別支援学級へ進学した「光」の成長と新たな問題などが描かれている本）

② 考える 【バリアフリーやユニバーサルデザインについて考える】 1 h

◎ 乙武さんのビデオ（テレビを録画）を見て、バリアフリーなどについて考える。

気づかせたいこと

- ◇ 普段、何気なく生活している中でも、障がいのある人にとっては生活しづらいことがたくさんあること。
- ◇ ユニバーサルデザインの考え方が広まってきていること。

第二次

4 時間

支援学校との交流に向けて

③ 知る、考える 【支援学校を知る】 2 h

- ◎ 支援学校からのビデオレターを見る。
- ◎ 支援学校の先生による事前授業、質問タイム

支援学校の小学部にも1年生から6年生までの友達があります。車いすに乗っていたり、足に装具をして生活している友達もいます。支援学校の時間割には、国語や算数などの小学校と同じ教科もありますが、自立活動（※）という時間もあります。

他に、いろいろな種類の車いすの紹介、車いすの押し方 など

※自立活動の目標＝個々の児童又は生徒が自立を目指し、障害による学習上又は生活上の困難を主体的に改善・克服するために必要な知識、技能、態度及び習慣を養い、もって心身の調和的発達のための基盤を培う。（特別支援学校小学部・中学部学習指導要領より）

④ 考える、動く 【交流に向けて】 2 h

- ◎ 支援学校へのビデオレターを作成する。
- ◎ 交流会でのあいさつや内容について考える。

わたしたちもビデオレターを送ろうよ！

どのようにして、いっしょに楽しもうかなあ。

考えさせたいこと

◇ どういうところに着目して、何を工夫すればいっしょに楽しめる交流ができるのだろうか？

学 習 活 動	指 導 の ポ イ ン ト
<p>○ 交流会の内容について考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ わかりやすいあいさつを考える。 ・ いっしょに楽しめる遊びを考える。 ・ 遊び方や楽しみ方の説明を考える。 ・ どのようにコミュニケーションをとっていけばいいかを考える。 <p>みんなのよく知っている歌を歌ったらどうかなあ。</p> <p>よくわかるように、ゆっくりと話せばいいかなあ。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ バリアフリーやユニバーサルデザインについて学んだことを思い出す。 ・ 乙ちゃんルールやビデオレター、支援学校の先生の話を読み出し、わかりやすいあいさつやいっしょに楽しめる遊び、その方法について考える。 ・ 言葉を交わさなくてもできるコミュニケーションの方法について考える。 <p>スロープを使ってペットボトルボーリングをしようよ！</p> <p>手をつなぐだけでも通じ合えるかもしれないなあ。</p>

第三次

2 時間

支援学校との交流

⑤ 深める 【支援学校の児童との交流】 2 h

- ◎ 自分たちの考えた遊びを通して交流する。

【目標】障がいのある児童とふれあう中で、心を通わせ生命の尊厳やちがうことの素晴らしさを体感する。

学 習 活 動	指 導 の ポ イ ン ト	備考(準備物)
1 交流全体会 ・ 支援学校の児童のあいさつを聞く。 ・ 支援学校の児童へのあいさつと歌を披露する。	・ 話している人をしっかり見て、心を傾けて聞く。 ・ わかりやすく表現する。	名前カード 歌詞カード
2 各クラス（グループ）に分かれて交流する。 ＜主な交流内容＞ ・ 風船バレーボール ・ ハンモックでゆらゆら ・ サイコロコロコロ（すごろく） ・ 手話で歌う 「ともだち」 ・ おしくらまんじゅう ・ スロープでのペットボトルボーリング ・ フルーツバスケット ・ ころがし卓球	・ 相手の障がいの特性に配慮して行動する。 ・ 支援学校のそれぞれのクラスの先生の説明、注意をよく聞く。 ・ わからないことや疑問に思ったことは素直に質問する。	
3 全体で集まり、終わりのあいさつ ・ ふれあった児童たちと別れとお礼のあいさつ	・ お互いに、次の出会いへの期待感をもてるようにする。	

ころがし卓球の様子



第四次

1 時間

振り返り

⑥ 振り返りを交流する 1h

◎ これまでの学習について話し合い、感想を書く。

＜児童の感想＞

「交流会」を終えて

- 手話をしながら歌を歌いました。「ともだち」という歌でした。手話をするのがちょっとむずかしかったです。行く前とかは不安やったけど、遊んでみて楽しかったです。
- くすぐり遊びとかハンモックとかをやりました。Aさんの手の動きや表情の変化で、わらってるとか、ねむたそうとか、先生はちゃんとわかっていました。教室に入ると、みんな横になりながらお茶を飲んでいました。体温調節や水分調節がとても大切だとわかりました。

○ Bちゃんとあいさつした後、わたしが手を差し出すと、笑顔になりギュッと手をにぎり返してくれました。私はその時、とてもうれしかったです。その後、ふうせんバレーをしました。
みんな一生けんめいやってくれたので、うれしかったです。

取組みを終えて

校内に重度の障がいのある児童が在籍していないので、この交流を実施するまでは、障がいのある人どのようにコミュニケーションをとればよいのかわからず、不安を感じている児童が多かった。

しかし、支援学校の児童や先生方に明るく温かく迎えていただき、緊張していた気持ちも少しずつほぐれたようだ。どうすればよいかわからないことを素直に支援学校の先生に聞きながら実際にふれあう中で、言葉だけでなく様々な方法でコミュニケーションがとれることがわかって、支援学校の児童たちとのゲームなどの交流を本当に楽しんでた。これまでの知識だけの学習ではわからなかった、たくさんのことを心と体で学んだ交流会であった。

この取組み全体を通して、自分の身の回りだけの狭い範囲でしか物事を見ていなかった児童たちの視野が広がったことであろう。さらに、この交流会をきっかけとして、支援学校の「もちつき大会」に参加したり、本校の「チャイルドカーニバル」（児童会主催の行事）に支援学校の児童を招待したりして交流を継続している。また、児童たちは「チャイルドカーニバル」の計画を立てる際、バリアフリーの考え方を取り入れて、障がいのある人も楽しめるよう計画を立てていた。

このように、この取組みにより体感し、気づき、学んだことは、障がいのある人に対しての思いやりから行動に確実につながっている。今後は、日々の生活における身近な友達や家族への思いやりや助け合いにも生かすことができるよう、さらに支援していこうと考えている。

◎ 支援学校の「もちつき大会」での交流の様子



【 ポ イ ン ト 】

☆ 支援学校との交流を通して、障がい児(者)の生活理解を深めることを目的とした取組みである。単に「交流すること」を目的とするのではなく、支援学校からのビデオレターや教材学習を行うなど丁寧な事前学習を行い、事前学習を基に自分たちに何ができるかを主体的に考え、アイデアを出し合って、交流を行っている。知識のみの福祉教育や障がい理解教育ではなく、実際に出会い、交流を通して感じたことがともに生きる社会を創造することの必要性を考える機会となる。この交流で築いた、支援学校と地域の学校の児童の互いの顔がわかりあうようなつながりは、児童たちの将来の生活にとって貴重な財産になるであろう。